教皇様の聲

キリストの復活は私たちの希望

〈ローマに集まった世界の学生・若者たちへのお話〉

1　「もし私たちがキリストとともに死んだのなら、また彼とともに生きることをも信じる。そして死者からよみがえられたキリストはもう死ぬことがないと私たちは知っている。」（ローマ6・8〜9）使徒のこの言葉は、使徒職の広大な分野を考えさせてくれます。

（…）復活祭を間近にして、ここキリスト教の中心地、ペトロのもとにお集まりになった皆さんは、再び贖い主の死と復活を目前にしています。イエズスが皆さんの心を「つかみ」、受難と死と限りない愛に浸らせてくださいますように。秘跡の内にキリストと出会い、祈りと償いのわざに専心することで、主の受難と死の秘義を生きることができます。

2　私の思いは、主が言い知れぬ愛を込めて十字架を抱きしめた、聖地エルサレムへと向かいます。「家庭への手紙」の中でパスカルの言葉を引用しました。「イエズスは世の終わりまで苦悶の中にいるだろう。」（22番）血塗られた緊張状態の中にある地域のみならず世界のここかしこで、多くの人、多くの家庭の中で、イエズスは今もなお苦しんでおられます。愛する皆さん、あなたたちの生活を通してご家族や友人の間でキリストがよみがえり、真の平和をもたらしてくださることを願ってやみません。（…）

キリストの復活は希望の礎

3　（国際学生会議のため集まった）皆さんの今年のテーマは「家庭の発展」です。福者ホセマリア・エスクリバーが力説したように、個人の聖性は家庭の聖性と切り離すことができません。私も「家庭への手紙」の中で家庭はまことに教会の道であると書き、そのことをよく考えてもらえるよう願いました。紀元二千年の門口に当たり、家庭こそは新たな福音宣教の心臓でなければなりません。

家庭の福音化を妨げる障害物のあることに、キリスト信者は気づいています。でもキリストの復活は、人間の弱さから生じる恐れを永久に打ち払う生ける希望（Iコリント15・19〜20参照）の基礎です。信仰は、私たち一人ひとりの中でイエズスがよみがえられることを約束してくれます。「愛は…これらの苦痛をいやすことが可能です。…この可能性は神からの赦しと和解の恵みの受け皿となり、そしてこの恵みは不断のやり直しに必要な霊的力をもたらしてくれます。」（「家庭への手紙」14番）繰り返し申し上げますが、「危険を恐れてはなりません。神の力は皆さんの困難よりもずっと大きいのです。…赦しの秘跡の効力は、世の中に働く悪よりもはるかに偉大なのです。…堅信の秘跡の神的力は、世の中に現われる腐敗よりも一層大きな影響力を持っています。特に聖体の秘跡の力は比較にならないほど偉大です。」（同18番）

4　皆さん、この四旬節の間恩寵の助けを受けて生活自体を復活の具体的な証しに変えることができるよう、そのために必要な心構えをつちかってくださることを望みます。皆さんの中におられる復活のキリストに信頼し、現代世界の勇気ある福音の証人となってください。主が教会にゆだねられた使命を果たすため、生涯をかけて忠実なしもべたらんとした福者ホセマリア・エスクリバーが皆さんを導いてくれるでしょう。

忘れないでください。この使命の中でも、家庭生活をキリスト教化する仕事は今日もっとも重要です。実に、家庭は「大いなる戦いのまん中に」います。「家庭は善と悪の、いのちと死の、愛と愛に対立する一切のものとの対決の中におかれているのです。善の力を解放するために戦う使命は、まず家庭に委任されています。」（同23番）それゆえ私は、美しい愛の御母マリアに皆さんをゆだね、神のまことの愛、最も美しい愛に包まれることを願います。「人の人への贈り物」は「ご自身が贈り物であり、また全ての贈り物の源でもある方から来なければならないのです。」（20番）

5　親愛なる兄弟姉妹の皆さん。（…）家庭は「教会の道」です。日々の生活の中で、力の及ぶかぎり、社会の基本細胞である家庭を守り支えてください。日常生活の聖化を目指して日々努力を重ねる皆さんのために、心から使徒の祝福を送ります。

6　「家庭の発展」についての皆さんの考察は、私たちの信仰の核心に触れています。イエズスのカルワリオへの歩みと栄光の復活は、全ての家族のメンバーが互いに自らを与え、困難を克服し、愛の交わりとなるための力をどこに求めれ

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1997

発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

ばよいかを教えてくれます。このような人間の愛は、神の創造の愛、救いの愛の反映です。今年の復活祭が、キリスト信者としての皆さんの全生涯を照らしだす贖いの秘義を、教会におけると同じように皆さんの家族や勉強や仕事の中で、一人ひとりの心に迎え入れる時となりますように。

死んで復活された主が、皆さんを恩寵で満たしてくださいますように！

7 苦しむキリスト、勝利のキリストとかたく一致して過ごすこの聖週間が、福音の救いのメッセージをこの世の日々の現実の中へ運び伝えようとする皆さんの献身を確認する機会となりますように。（…）「父が私を送られたように、私もあなたたちを送る。」（ヨハネ20・21）イエズス・キリストの本物の使徒になるという挑戦を、いま、そして来たる紀元二千年に皆さん方全員が受けて立つことを願います。世界は皆さんの信仰と聖性の証しを、若々しい情熱と寛大さを必要としています。どうか聖霊が皆さんのうちに、それを完成させてくださいますように！

私の愛と使徒の祝福を皆さんに送ります。（…）

（九四・三・二九）

「あなたは宣教者」

「バチカン公会議をふりかえる」シリーズ11

（…）本日は「教会の宣教活動に関する教令」について考えてみたいと思います。

この教令はまず、「教会はその性質上、宣教者である」（2番）と述べています。まことに教会はキリストの霊に促されて、あらゆるところに良い知らせを伝えなければという心底からの必要にかられます。福音の意味と核心は「良い知らせ」です。神は人間を愛しておられる！　キリスト、託身したみことば、贖い主において神は人となられた。キリストを贖い主と認めることによって、人間は神の子となり、神の生命にあずかります。こんなすばらしい、重大なニュースを教会はどうして自分だけのためにしまっておけるでしょうか？このことを宣言することによって教会はキリストの命令に従うばかりでなく、この世でキリストの宣教を続行します。聖霊の力を借りた教会は、ある意味で福音を「目に見えるものとする」のです。全キリスト信者に課せられたこの基本的な任務を果たすにあたり、私たちは「諸国民のもとへの」宣教とは「教会がまだ根を深くおろしていない国民や社会の福音化と、教会の植えつけ」（6番）であることを知ります。

時代を経て、教会の宣教の歴史は輝かしいページを綴ってきました。今日も多くの宣教者たちが福音のため、人類の向上のために生命を捧げ、しばしば危険で困難な状況のもとで最も貧しい人々のため自らをなげうって働き、時には殉教という最高の証しを立てることもあります。これら全ての福音の伝達者、「特にキリストのみ名のために迫害を耐え忍ぶ人々」（42番）のために、私も公会議の教父たちと共に愛を込めて挨拶を送りたいと思います。

時代を経て、教会の宣教活動が限界をも経験したのは事実です。しかし公会議は、キリストのメッセージはあらゆるシンクレティズム（色々な説や教えをないまぜにして考えること）を避けつつ、民族固有の豊かな文化を傷つけることもない、と強調することによってこの驚くべき使徒的冒険の精華を取り上げ、再評価しています。教会の目標は人々と福音との真の出会いです。こうして「人々の心と精神に、あるいは諸国民のそれぞれの儀式や文化の中に種まかれたすべて善なるものは、単に滅びないのみならず、矯正され、高められ、完成される。」（9番）ここでとても重要なのは、公会議が宣教地の部分教会に注目し、現地の人々の中から聖職者を育て、福音を民族集団や国家の生きた機構の中に根付かせることができる信徒を育成することによって、部分教会の発展を望んでいることです。

紀元二千年を目前に、福音宣教の星である祝された処女が、教会に新たな宣教の熱意を燃え立たせてくださいますように。「深くキリスト教の生命に生きることが信仰を広めるための第一のそして最高の義務であると知らなければならない」（36番）という公会議の勧めを信者たちが受け入れることのできるようお導きください。信者の証しが現代世界への新たなキリスト公現となり、キリストの喜びと救いの現われとなりますように。（九六・一・七）

神の霊はキリスト者の一致をうながす

兄弟姉妹の皆さん。

☆ 教会の歴史には、唯一の起源に基づく東西二つの局面があることを理解しなければなりません。教会の始まりは、全教会が主とあおぐキリストです。教会の起源は聖霊です。五旬祭の日に生命と全ての賜物の根源として降り注がれました。教会の始まりには使徒たちの姿も見えます。復活した御方の証人であり、信仰における父と言える人々です。これら共通の生きた起源から、摂理が決めた時、私たちの従順によって、待ちわびていた新しい一致が東西のキリスト信者の間に生まれるに違いありません。

積極的な期待のうちに、本日はキリスト教世界が分裂していなかったあの数世紀、特にエルサレムで福音宣教が始まり、当時の世界のすみずみまで広がっていった初期の頃を思い起こしてみたいと思います。師の教えがさまざまな文化を実り豊かなものにし始めました。この大きな変化が意見の相違や緊張をも

たらすことは避けられませんでした。使徒の時代、すでにエルサレムの公会議はユダヤ系の信者と異教から改宗した信者との考え方の相違を調整せざるを得ませんでした。この出来事は、妥協することなく互いの寛容と交流を培うことによって、いかに真理に奉仕すべきかを示す輝かしい証しとなりましたが、残念ながら、歴史の中でこの模範に倣うことはそれほど容易ではありませんでした。

☆それでも神の霊は、再び私たちの間に完全な一致が実現するまで、私たちを休ませてくれません。聖霊の声は、特に東西で崇敬を受ける聖人たちの証しを通じ、激しさを増して届けられます。それは最初の数世紀から、互いの交わりを目指して努力した聖人たちです。

アンティオケアの司教であり、ローマで殉教した偉大な聖イグナチオを思い起こしたいと思います。彼は自らのことも忘れて、各地の教会に感動的な手紙を書き送り、司教を中心に一致せよと勧め、便りや祈りの交換を通じて互いの交わりを深めるよう説きました。ローマの共同体に対しては、「愛徳を統括する」教会という、まるで未来を予見したかのような称号を与えました。（ローマへの手紙）

二世紀には、もう一人の偉大な聖人、教会一致の人と呼ぶにふさわしい聖イレネオを忘れることはできません。スミルナに生まれ、後にリヨンの司教となった彼は、東と西をつなぐ「橋」のような人でした。その神学の著作の中で、彼は信仰の規準として、様々な国の言葉があたかも「一つの口」（Adv. Haer., I, 10, 2）で宣言しているかのような伝承を提示しています。また教会の生命を多くの声から成る「交響曲」と考え、復活祭を祝う時期をめぐって生じていた緊張状態の中で、相互理解を養うため努力しました。

☆キリストと教会の御母であるマリアが、二人の偉大な証人の後に続く私たちの歩みを助けてくださいますように。聖霊にすなおに従い、二つの伝統に存在する正当な相違点を尊重しつつ、互いを認め評価し、より深い信仰と愛のうちにもっと近づくことを学べますように。聖母が私たちの心に完全な一致を求める願いを植えつけ、新たな熱意をもってこの目的を実現させるため、私たちを駆り立ててくださいますように。

（九六・六・三〇）

使徒的勧告『「和解と悔悛」要約 1』

一九八四年、教皇さまは「和解と悔悛」と題する使徒的勧告を発表し、罪の本質について、また赦しの秘跡の大切さについて考察されました。今月から数回に渡り、順を追ってこの勧告の要約を掲載します。紀元二千年の聖年を迎える準備として教皇さまが重視する「悔い改めと和解」（使徒的書簡「紀元二千年の到来」32番）を考えるための一助となれば幸いです。なお、この要約は本紙八五年二月号掲載記事の再録です。

現代人にとって「和解と悔悛」とは、（…）「イエズス・キリストの言葉を再発見せよ」という招きです。私たちの主、師であるイエズス・キリストは仰せになりました。「悔い改めて福音を信じよ。」（マルコ1・15）すなわち愛に満ちた良き訪れ、神の養子について、それゆえ兄弟愛についての、良き訪れを受け入れよ、と。（…）

和解を切に望む心、また和解そのものが効果的かつ完全になるか否かは、根本的な傷を癒すため、その傷自体、すなわち全ての傷の根源となる罪そのものについて、どの程度理解できるかにかかっています。（…）

世界代表司教会議（一九八三年）の基本文書では、「和解」の根本的側面のいくつかを強調していますが、同文書作成の主要な目的は「和解」という主題を提示することでした。（…）

討論や共同研究、絶え間ない綿密な努力がなされた結果、貴重な収穫が数多く得られ、最終文書に要約されました。（…）

この使徒的勧告の冒頭に当たり、ルカによる聖福音書の中のすばらしい一節が心に浮かんできます。それは、回勅『慈しみ深い神』（5～6番）で説明したように、人間味豊かであると同時にすこぶる宗教的なくだり、あの放蕩息子のたとえ話です。（ルカ15・11～32）

教会は和解のための大いなる秘跡

教会には和解をのべ伝える使命および、言うならばこの世にあって和解の秘跡となる使命があります。教会こそ「秘跡」、つまり様々な方法による和解のしるしであり媒体なのです。それらの方法の重要性は異なっていても、全てが一つになって、慈しみ深い神が人類に与えようとお望みになった和解を得る道を形作っていますから。

教会が秘跡であるというのは次のような理由によります。第一に、教会は和解を得た共同体として存在し、キリストのわざを世に証し、世にあってそのわざを代行するから。また、聖書の守り手・解釈者としての務めを任されているからでもあります。聖書こそは、和解を伝えながら、続く世代に神の愛の計画を告げ知らせ、キリストによる普遍的な和解への道を示す「良き訪れ」であるからです。

教会が秘跡であるというもう一つの理由は「七つの秘跡」にあります。一つひとつの秘跡が「教会を形成する」からです。（聖アウグスチヌス「神の国」22・17、聖トマス・アクイナス「神学大全」III, q. 64）秘跡は全てキリストの復活秘義を記念し更新しますから、七つの秘跡はみな教会の生命の源であり、教会の掌中にあって、神への立ち返りと人間同士の和解を実現する手段なのです。

個人的罪（自罪）と社会的罪

罪とは、厳密には常に「個人的な行為」です。罪はあくまで

不変の教え

も個人の自由意志による行為であって、集団や共同体のものではありませんから。

ここで、たびたび言及される「社会的罪」について述べたいと思います。「社会的罪」と言う時、まず第一に個人的罪が何らかの形で他者に影響を及ぼす事実を知らねばなりません。神秘的で不可解なようではあっても、現実的具体的に人間は互いに結びついているからです。

罪にはそれ自体、直接隣人を傷つけるものがあります。もっと厳密に福音書の用語を使えば、兄弟姉妹を傷つけるということです。隣人を傷つけるがゆえにそれは神への反逆でもあります。これがふつうに「社会的罪」と言われる罪で、「社会的罪」の二つ目の意味です。

三つ目の意味は、さまざまな人間集団相互のつながりに関わります。人間集団相互の関係は必ずしも神のご計画に従っているとは言えません。神は世界に正義と自由を、個人、集団、民族の間に平和をお望みです。それゆえ、階級闘争などを指揮したり論理的に正当化しようとする人があれば、何者であろうと社会悪と言わねばなりません。教会が罪の「状況」について述べる時、またある社会集団の状態や行為を「社会的罪」として非難する時は、その集団の大小を問わず、国家全体であろうと国家群であろうと、そのような「社会的罪」は「個人的罪」が積もり積もった結果であると認識した上で公言しているのです。

責任の置き所はやはり個人にあります。全て「罪の状態」の根底には必ず罪人がいる、ということです。　（次号に続く）

教皇さまの動き

●3・8　フランス・プロバンス地方の司教団の訪問を受けて。「典礼は福音を伝えるための実にすぐれた手段であり、言葉よりも雄弁に人の心の願いを絶対なる御方のもとへ届けてくれます。」「秘跡の授与は福音宣教と切り離せません。ただし秘跡を受けてもそれが日常生活とは無関係なまま終わらないよう注意する必要があります。」

●3・9　お告げの祈りの時のお話。「四旬節は、キリスト教の中心的なメッセージすなわち人間に対する大いなる神の愛を考える良い機会です。現代人は神の愛など必要ないと思っているかに見えますが、自分の弱さや孤独という現実と向き合う時、将来への不安、病気や死への恐怖に捕われていることを悟ります。…キリスト教は慰めの安売りはしません。真の信仰と厳格な道徳的生き方を要求します。でも同時に希望の理由を教え、御子を与えるほどの憐れみ深く愛にあふれた父なる神の姿を示してくれるのです。」その後、ペルーの日本大使館人質事件に触れ、「人質となっている人々とそのご家族に心から同情します。…他者の尊重と建設的な対話のみが問題解決の道であり、社会の安寧と人々の間の理解につながります。」

●3・12　3月4日づけで教皇さまから国連事務総長当てに出された、ザイールへの国際援助を求める手紙が公開された。「国際協力によって事態の悪化が防げることを信じ、心からの訴えをする次第です。…人間として、戦火と暴力の中に取り残された人々を見過ごすことはできません。…ルワンダからの難民が安全に故国へ戻ることができなければ、永続的な平和は望めないでしょう。それには国連の協力とアフリカ諸国の平和的介入が不可欠です。」「国の内外を問わず、あらゆる民族的・政治的立場を尊重しつつ対話を進めるため努力する人々を勇気づけなければなりません。」

●3・14　教皇庁文化評議会総会で、文化と信仰を統合すべきことを話された。「希望が消えれば文化も死んでしまいます。キリストへの信仰は文化に神の国への希望という新たな次元を加えます。福音は文化を脅かすのではなく、新たな喜びと美、自由、意味、真理、希望をもたらしてくれます。」同日、聖ペトロ広場の群衆へ。「イエズスの公生活に目立たずつき従い、御子と離れていても心はそばにあって教えを胸におさめ考え続けた聖母は、みことばを聞く人の模範です。…聖母の姿は、キリストへの忠実ゆえに試練や困難に出会っても、みことばに聞き従う人に約束された未来の喜びを見つめ続ける力を与えてくれます。」

●3・15　シエナからの巡礼団を迎え、「皆さんの個人生活、家庭生活、また社会や仕事の中にキリストを迎え入れてください。キリストの存在は真の豊かな人間関係を保証します」と勧められた。同日、フランス・ミディの司教団を迎え、「障害を持つ子供たちのための要理教育に身を捧げる人々もいます。苦労もありますが、小さな人々にご自分をお見せになる神の御心に触れることができるはずです。」「科学の知識を授けるのと同様、霊魂の成長のための糧も若い人々には必要です。」

●3・16　ローマ市内の教会でミサをあげられ、夜間にも教会を開け、訪れた人が典礼にあずかり、赦しの秘跡を受ける機会を設けることは、有効な福音宣教の一手段であると話された。同日、お告げの祈りの前に書斎の窓から人々を招き、「アルバニア和平のため祈りましょう。暴力では社会問題は解決しません。武器を下ろしてください。」

●3・17　教皇庁内赦院のメンバーとの会談の席で。「罪の感覚が鈍くなったため多くの人が苦しむ結果となっています。」家庭評議会が出版した「聴罪師のための便覧」に言及し、「客観的な道徳秩序についての教会の教えを明確な言葉で表わしたもの」と言われた。さらに「神の赦しをふさわしい心構えで受けられるよう、信者の良心の形成に努めること。それには告解の場で司祭が与える注意や勧告、償いの行為に加え、要理教育、説教、社会メディアの関与が効果的です。」

「教皇様の声」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価　一部百八二円　（送料とも）■一年予約　送料とも一、四五八円から。詳しくは精道教育促進協会まで。

郵便振替
01130-8-72393